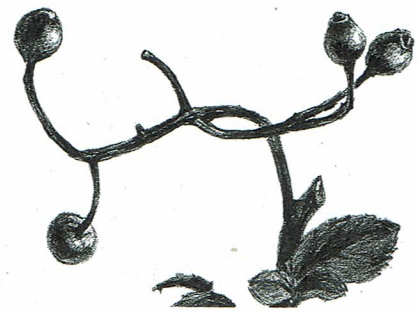


朝日 俳壇 歌壇



日高理恵子 (ノイバラ)

◆小林貴子選

赤い羽根あの人胸を反らしすぎ
 (東広島市) 久岡 隆
 またちがふ顔の小鳥が来たりけり
 (横浜市) 三玉 一郎
 中東の胸裂く所業秋憂ふ
 (さいたま市) 大塚 四郎
 鹿の王気配を感じ遠さかる
 (フランス) 堀山 穰
 砂浴びの驢馬の仰向け秋うらら
 (小山市) 倉井 敦子
 秋風はアコースティックバージョンだ
 (横浜市) 菅谷 彩香
 一口は何も掛けずに新豆腐
 (広島市) 原森 泉
 炎なき暑しに慣れて曼珠沙華
 (我孫子市) 藤崎 幸恵
 待ちかねし新米を研ぐ淡々と
 (藤沢市) 朝広三猫子
 本当は妻は大物鯖味噌煮
 (長岡京市) 寺嶋 三郎

【評】一句目、付けてもらう場面かその後か。人物像が浮かんでユーモラス。二句目、次々に来る小鳥が可愛らしく捉えられた。三句目、ウクライナ侵攻に加え中東情勢に心が痛む。四句目、フランスの学校からの教人の投句はどれも心引かれた。

◆長谷川權選

寒暄さらば谷村新司近く
 (愛知県阿久比町) 新美 英紀
 早世の詩人のことき秋惜しむ
 (横浜市) 前島 康樹
 やつとやつとえくぼができた初もみじ
 (成田市) かとうゆみ
 回想を歩きつ戻りつして夜長
 (苫小牧市) 齊藤まさし
 衰へてなほ鉦叩く鉦叩
 (藤沢市) 朝広三猫子
 旅人としてふるさとの栗御飯
 (奈良市) 田村 英一
 一家六人一間の疎開甘藷
 (市川市) 白土 武夫
 虫籠にいなが一匹孫帰る
 (市川市) 谷田部達郎
 団栗の面白さつに雨散
 (名古屋市) 池内 真澄
 毎日の卓に秋刀魚のつたつ
 (西宮市) 東谷 節子

【評】一席。辞世めいた歌詞だった。一世を風靡した歌手に追悼句あまた。二席。確かに今年の秋は早世の詩人。いよいよ惜しまれる。三席。えくぼの子がうらやましかったのだ。小四。十句目。気がつく時代は様変わり。秋刀魚に限らず。

◆大串 章選

翔平と聡太が並ぶ案山子かな
 (大阪市) 井上 浩世
 曾孫の重きが嬉し日向ほ
 (京都市) 多田羅初美
 天才は天才を知る葛の花
 (安曇野市) 望月 信幸
 戦争が色なき風を赤く染め
 (川崎市) 秋月あかり
 放棄田に水なき絶えず秋の声
 (多摩市) 田中 久幸
 役目終へて雀の友となる案山子
 (東広島市) 久岡 隆
 天国と地獄の旅の濁り酒
 (新座市) 丸山 巖子
 旅と云ふ励みを持ちて秋耕す
 (鳥取県邑南町) 服部 康人
 捨案山子もう青空も見飽たり
 (奈良市) 田村 英一
 その中に囁くやうな虫の声
 (静岡市) 松村 史基

【評】第1句。今年活躍した野球の大谷翔平と将棋の藤井聡太がモデル。今年の案山子らしい。第2句。「重きが嬉し」に実感あり。曾祖母と曾孫の楽しい日向ほこ。第3句。返句「鈍才は鈍才を知る葛の花」。俳句は庶民の文芸(飯田龍太)。

◆高山れおな選

十字架を背負ふイエスと案山子かな
 (大村市) 小谷 一夫
 このままでこのままでいい良夜かな
 (我孫子市) 森住 昌弘
 出没のけもの警戒文化の日
 (本巣市) 清水 宏晏
 眼よりまじく乾びゆく鴨の鱗
 (相市) 物江 里人
 木守の消えては見ゆる九十九折
 (多摩市) 田中 久幸
 蟻の戦士あへなく食はれけり
 (尼崎市) 田中 節夫
 切り株に魔女の口紅毒キノコ
 (フランス) シャラン レイシア
 抜歯せし夜寒の口のうつつかな
 (藤沢市) 大内 菅子
 こんなもの買ふ人あるか浮いて来い
 (成田市) 神部 一成
 猿の尻を河童が笑ふ菊日和
 (前橋市) 田村 とむ

【評】小谷さん。なんと不敬な発見。しかしそもそも神が死刑になるという逆転がキリスト教の根拠なのだから、案外、不敬でもないのか。森住さん。今年の中秋の名月は九月二九日。当方も堪能した。清水さん。最近本当に多いこのニュース。

うたをよむ 歌を探し求めて

弘平谷隆太郎

国語の教科書で短歌に出会う。そうい
 う中高生も少なくないだろう。ところが
 で、そこに載っている短歌は、誰がどの
 ように選んでいるのか。教科書の編集
 者および全国の学校現場や大学の先生か
 らなる編集委員が、数十、数百首と候補
 をかき集め、掲載歌を決めていくのだ。
 正岡子規、与謝野晶子、寺山修司。近現
 代の短歌史上重要な歌人の、いわゆる名
 歌は外せない。でも、いかにも教科書然
 とした歌ばかりを読んで(読まされて)、

子どもは短歌に興味を持てるだろうか？
 ここが、教科書編集の悩みのたもとだ。
 ひまはりのファンタシシアはとほけれど
 とほけれどファンタシシアのひまはり
 永井陽子
 いまの教科書に載っている歌だ。日向
 にはもろろんのこと、短歌史の日陰にた
 った、優れた歌の花はいくつも咲いてい
 る。永井陽子のこの歌は、短歌という定型
 詩の持つ豊かな音楽性を教えてくれる。
 コッホでもミレーでもない僕がいて詩

きたい種を探す夕暮れ
 現代の人気歌人の歌もある。生涯かけ
 て追うべき夢が見つかからない。そんな思
 春期の葛藤にまっすぐ届いていく歌だ。
 冬の駅ひとりになれば耳の奥に硝子の
 駒を置く場所がある 大森静佳
 平成以降に生まれた歌人の歌も載って
 いる。殺風景な冬の駅でも「硝子の駒」
 という一語を詠み込むだけで、凍とした
 美しさを帯びる。それが、言葉の力だ。
 時代とともに子どもの感性は変わる。
 だから、教科書も変わり続ける。子ども
 の感性に響く歌を探し求めて、これまで
 も、そしてこれからも。(教科書編集者)

ウラジスラバ・シモノバ著「ウクライナ、
 地下壕から届いた俳句」 篠まどか監修
 「地下壕に紙飛行機や子らの春」「雨に転が
 る血まみれの小さき靴」(集英社・2200円)
 高橋修宏著「鈴木大林男の百句」 副題は
 「<戦後>を問い続ける」。掲載句に「花篝
 戦争の闇よみがえり」「永遠に孤りのことし
 戦傷の痕」(ふらんす堂・1650円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メ
 ディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿
 は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作品のみ。作品
 の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴
 海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝
 日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信